

## 【東京】「子どもがわくわくする学びの場」が新しい病院のキーワード-白波瀬丈一郎・東京都済生会中央病院健康デザインセンター長に聞く◆Vol.2

2023年2月3日（金）配信 m3.com地域版

歴史ある病院の特徴を尊重しつつ、新しい姿も模索したい——。そんな狙いで2020年に開設された東京都済生会中央病院（港区）の「健康デザインセンター」はこれまで、白波瀬丈一郎センター長を筆頭に職場の環境改善に向けた活動や感染対策などを行ってきた。同区の養蜂活動を生かした事業やユニクロの出店など病院全体でもユニークな動きが進む。白波瀬センター長が次に見据えるのは、「子どもがわくわくする学びの場」としての病院だ。（2022年12月1日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



白波瀬丈一郎氏

——先生は、東京都済生会中央病院を「健康な人も来たくなる病院にしたい」と考えました。センター開設前の事業構想は。

地域の人の向けてさまざまな企画やイベントを行いたいと考えていました。宗教家などを招いて人間の生死について一緒に考えたり、院内にピアノを置いて、誰でも弾いていい「ストリートピアノ」として親んでもらったり。当センターは現在、私と臨床心理士の三浦有紀さんの2人が常駐し、非常勤で精神科医と臨床心理士が1人ずついる体制ですが、三浦さんは2018年に京都市の大学で始まり全国に拡大した健康イベント「ウォーキングチャレンジ」を港区でも開きたい考えがありました。

(1) 私が慶應義塾大学時代に行っていた企業向けの復職支援「KEAP」と同じ事業モデルの展開、(2) 院内の環境改善活動、(3) 先述の地域向けイベント、さらに(4) 訪問診療などのアウトリーチ活動——こういったことを始めたい思いがありました。

——しかし、センターが開設した2020年に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行します。

COVID-19の流行で院内に人を呼ぶことができなくなり、対外的な活動を進めることは難しくなりました。そこで、「当面は働きやすい病院づくりに向けた活動を」と切り替えました。各部署を訪問して職員の困りごとを聞き取り、院内にあるハラスメント対策委員会の事務局を担って各種相談に対応。COVID-19で心身ともに疲弊する職員が増えるなか、メンタルヘルスの相談も寄せられました。これに関しては私が過去に精神科医として行ってきた経験を生かしました。

「スタッフの手指消毒を徹底したい」と感染制御チームから相談を受けたときは、私たちが職員の出勤に合わせて病院の入り口に立ち、あいさつをしながら消毒をお願いしました。この活動には院長と副院長の協力も得、日頃の頑張りへの感謝も伝えつつ継続しました。

感染関連ではこのほか、院内有志でつくる職員サポートチームの事務局を当センターが担い、「アンチコロナカップ」と称して各部署が行っている感染予防対策の動画を募集、食堂のモニターに流しました。「しんどいときこそ遊び心が大切」と考えての企画でしたが、これには思いのほか作品が集まり、人気のアニメやドラマを模した動画などユニークなものも複数ありました。緊張が続く仕事の中で、職員の気持ちがふっと和らぐ機会をつくれたかもしれません。

——医療機関では珍しい動きかもしれないですね。「何でも屋」のような。

新しい病院づくりには、「思いついたことを次から次にやってみる」姿勢が大切だと考えています。「やりながら考える」アプローチは、私が新しい病院像を練っていたときに取り入れた「デザイン思考」の特長でもあり、変化のスピードが速くない、むしろ往々にして遅くなりがちな病院では特に重要だと思います。

健康デザインセンターは病院のいろいろなところに顔を出して、アクションの起点となりたい。職員の多くが小さなアクションに慣れ、何かの案が持ち上がったときに、「それいいね、面白そうだね。やってみようよ」と前向きな気持ちになることを望んでいます。

——病院では、センター開設の前からユニークな活動を考えていたとか。

済生会グループが進めているSDGs推進事業の一環として、当院では2022年4月から港区で採れた蜂蜜を活用した「みんなとプロジェクト」を実施しています。これは、同区の芝地区が町づくりの一環として行っている養蜂活動で採れた蜂蜜を区内の就労継続支援B型事業所に提供・発注し、蜂蜜入りのお菓子を作ってもらおうというもの。現在は主に受注生産をして販売しています。プロジェクトには私も主幹メンバーとして加わっており、ほかにも区内にあるラジオ局「文化放送」や町づくりを各地で行っている企業「オルト都市環境研究所」も参加してくれています。

衣料品店「ユニクロ」の出店も全国の病院では初めてのことで、メディアなどに注目されました。私の入職前に動き始めたことで、きっかけは職員の投書だったそうです。ユニフォームを着ている職員の中にはインナーにユニクロの服を着ている人が少なくないうえ、緊急入院する患者さんの中には替えの衣類を持ってきていない人もいることから、「あったら便利」と希望が寄せられたといいます。

製造・販売元のファーストリテイリングに相談したところ関心を持ってくれ、2019年から出店に向けて打ち合わせを重ねました。COVID-19流行で一時は目途が立たなくなりましたが、なんとか2022年3月にオープンにこぎつけました。

——確かにユニクロがあるのは珍しいと思いました。職員の投書がきっかけだったとは印象的です。

同社は出店以外の面でも協力してくれました。当院附属の乳児院で複数のCOVID-19感染者が出たときのことで、人員の欠如で病院本部の職員が施設の子もたちを見守ったのですが、職員が感染対策のために着ていた防護服はとても暑く、発汗によってすぐに替えの服が必要になります。衣服に困ってしまったのです。

こんな話題が院内の会議で持ち上がったとき、私は「ユニクロに相談してみたらどうだろう」と発案しました。周囲の中には「そんなこと頼めるの……」といった反応を示す人もいましたが、実際に相談してみたところ、快く多くの衣類を寄付していただけました。「そんなの無理だろう」と思うことも、やってみると案外うまくいくことがあるんですね。

——先生や健康デザインセンターの存在が病院にとって良い「かきまぜ役」になっていると。最後に、今後の展望をお聞かせください。

少しずつ、「思いついたらやってみる」事例が増えているのは良い傾向だと思います。この流れを生かして、院外でも「あの病院は何だか面白いことをやっているぞ」と認知してもらえればもっと地域を巻き込んだ活動もしやすくなるのでは。今後は感染状況を見つつ、当初に考えていた対外的な活動も行っていきたいですね。

その意味で特にやりたいのが、子どもを呼び込むための企画・イベントです。哲学対話や環境教育、子ども食堂……。子どもにとって病院が知的な刺激を得られる場所になれば、小さなころからの「なじみ深い場」になり、病

気の早期発見・早期治療につながる可能性が生まれます。「子どもがわくわくする学びの場へ」がこれからのテーマの一つです。

◆白波瀬 丈一郎（しらはせ・じょういちろう）氏

1986年慶応義塾大学医学部卒。2002年医学博士取得。1996年同学部精神・神経科学教室助手、2002年同教室専任講師。2014年同大ストレス研究センター副センター長、同教室特任教授。2020年から東京都済生会中央病院健康デザインセンターセンター長。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

